

## 分担研究：居住環境と子どもの健康に関する研究

### 総括研究報告

松田 一郎

**要約：**（１）高層階居住の母子関係は下層階居住のそれより密着し、自立を妨げているという問題は確実に改善の方向に向いている。しかし、子ども同士のつきあいでは、高層階居住の場合の方が下層階居住の場合に比して兄弟同士で遊ぶ割合が多く、友人との遊ぶ割合は少ない傾向にある。また団地内のコミュニケーションである団地内開催の行事への参加状況は低層階居住者の方が高層階居住者より多い。（２）低層階居住妊婦に比べ、高層階居住妊婦の方に流産が多くみられるが、後者では外出回数が少なく、飲酒習慣の比率も高いことが判明した。また一般的に言って居住階に関係なく妊婦の相談者の少ないと流産比率がより高い。（３）母親による受動喫煙は子どもの心身発育に悪影響を及ぼす。

**見出し語：**居住環境，妊婦，分娩，受動喫煙

#### I. はじめに

居住環境が子どもの健康にどのような影響をもたらすかという問題を調査し、できれば解決に向けての手法を探ることを目的に、2つのリサーチクエッションを設定した。（１）高層階と低層階では妊婦及び児の健康状態になぜ差が生じるのか（但しここで言う健康状態とは、心身共に健康であること、また幼児にあつては基本的な生活習慣の修得も加えて考えることとする）。（２）子どもの周辺の人の禁煙を成功させるにはどのような方法が良いか。

#### II. 研究方法

各研究協力者はアンケート用紙を用いたサーベ

イを行った。

#### III. 結果及び考察

1) 織田・河野は東京江戸川区内の公団分譲集合住宅で2回アンケート調査を行い、母親の周辺環境への適応性と心身の健康意識との関連性、それと幼児の成長発達との関わりなどについて検討した。他に屋外における母子間相互密着度を観察する目的で万歩計を装着し母子の行動量を測定した。アンケート調査は延べ世帯数485、延べ子ども数545名である。母子の行動観察は12例、行動量測定は8例について行った。なお、1～5階を低層階、6～13階を中層階、14階以上を高層階として分析した。

---

1) 熊本大学医学部小児科 (Dep.of Pediatrics,Kumamoto,Univ.)

母親の居住に対する満足度は団地周辺の諸施設、環境、例えば通勤・通学・通園の便利さ、遊び場の広さ・配置、車道や歩道の広さ・配置などに関係していることが判明した。実際的に、上層階と下層階で満足度に差が出るのはほとんどなく、上下階の騒音を下層階の居住者が問題にしているのが目につく程度である。特に興味をひくのは母親の居住に対する満足度はこうした回りの環境よりも、母親自身の心身の健康、特に精神状態の好・不調と関係することである。この視点からの調査結果をさらに解析すると、現在の住居に満足できない母親は満足してしている者よりも「身体・精神共に不調」と訴える割合が有意に高かった。また「身体快調・精神不調」と訴える母親は、「上下階の騒音」「医療施設の充実度」について有意に悪いと評価していた。夫（父親）との関係も因子の1つで「夫の精神的快調さ」が高い程、母親の精神的快調さも高くなる傾向を示した。

親子関係について調べるため、「日常のあいさつ」、「排便」、「食事」、「衣服の着脱」など幼児の基本的な生活習慣を観てみた。かつて1987年には、「高層階の母子ほど外出しにくく、また基本的な生活習慣の自立が遅れる」という結果を得たが、今回の調査によると低層階居住の子どもでは例えば「日常のあいさつ」のできない児の割合は前回0%、今回6.4%、一方高層階居住の子どもは、できない児の割合は前回14.8%、今回0%とかなりの改善がみられた。

廻りの人々とのコミュニケーションについてみると、高層階居住の子どもでは肉親つまり両親・兄弟と遊ぶ割合が下層階居住の子どもよりも高く、一方、友人と遊ぶ割合は下層階居住の子どもの方

が上層階に居住する子どもよりも高い傾向にあった。

住民間のコミュニケーションである団地内の催し物、行事の1つである「ふれあい祭」への参加状況についてみると、低層階居住者（85.4%）の方が高層階居住者（66.7%）よりも有意に高かった（ $P<0.01$ ）。

母子の行動観察、行動量測定の結果についてはまだ発表できる結果は得ていない。

高層・低層といった居住環境にあっても積極的に、その中で廻りと関わったりすることで改善される部分があることが示されたと思う。環境に支配されるのではなく、それにどう対応するのが良いのか、その指針を考えてみる時に来ている。

2) 逢坂は、今年度調査対象者数を増大し、さらに調査項目として、妊娠確認前後の妊婦の喫煙・飲酒・外出回数・相談する相手の数などを加えた。問題は、異常妊娠が単なる居住階数に依存するのではなく、他のパラメーターとどう関係してくるのか、その点を知ることにある。

調査対象は総数1431名で有職者235名、無職者1196名で、前者での流産は29/235(12.3%)、後者でのそれは92/1196(7.7%)で有職者に有意に多く、今回の調査は無職者について行われた。

この研究では1~2階、3~5階、6階以上の居住者に分けて解析した。流産の割合は居住階の上昇に伴い増加した。特に25歳以上の初回妊娠では著しく、25~29歳の妊婦では $P<0.01$ 、30歳以上の妊婦では $P<0.001$ で、6階以上居住妊婦での流産頻度が1~5階居住妊婦のそれを上回っていた。1~2階、3~5階の居住妊婦で見ると年齢に関わらず流産頻度に差はなく、24歳

以下、25～29歳、30歳以上の各群とも、むしろ3～5階居住妊婦の方が、1～2階居住妊婦より低い頻度であった。このことは運動量（5階までの住居ではエレベーターがない）がある程度多い方が好影響を与えることを示している。このことは妊娠確認前後の外出回数の多いほど流産割合が少ない（ $P<0.05$ ）ことにもあらわれている。

さらに外出回数別にみると、1日1回以下の場合、6階以上の居住者で明らかに流産割合が高い（ $P<0.001$ ）こと、一方1日2回以上の場合には差がなくなることもわかった。

他に、流産に関与する因子として飲酒、妊婦の相談者数などについても解析した。確かに居住階の上昇に伴い妊娠確認前に飲酒（週1回以上）していた妊婦の割合は高かった（ $P<0.05$ ）。しかし、前回調べたところ飲酒者と非飲酒者とは流産頻度に差が出ていないので、この結果は飲酒歴は上層階居住環境の場合に additional factor として働くことが推定される。妊婦の相談者が少ないと居住階に関係なく流産頻度が高くなる（ $P<0.05$ ）ことも示された。

上層階居住環境に住むという物理的状態を変えることは不可能でも、生活指導することで問題は解決の方向に向けられるのではないか、と思われた。

3) 永田・服部・松田は母親による受動喫煙が子どもの身体健康状況のみでなく、問題行動にも関与することを見いだした。特に後者は米国でかなり問題にされ（Pediatrics に報告）ているので、前回は煙草そのものの影響でなく、母親の性格に関係するのではないかと思いこの点を調査し、この点は予想通りの結果を得た。今回はもう一度、

前に返り、もしも受動喫煙が本当に子どもの問題行動に関係するならば、1日の喫煙本数と関係があるかという仮説を立てて調査した。

他にリサーチクエッションに関連して、妊婦の喫煙に対する意識調査とパンフレットを用いた介入研究も開始した。

母親の喫煙率を子どもの年齢と対比して検討した。妊娠前の喫煙率は、子どもの年齢が0～3歳（母親数495名）の場合23.1%、3～6歳（母親数938名）の場合22.3%、6～12歳（母親数277名）の場合14%であった。このことは若い母ほど喫煙率が高くなること（ $P<0.01$ ）を示している。

また妊娠中はそれぞれの群で10.3%、10.5%、6.9%と一度低下するが、出産後は妊娠前に戻り、0～3歳、3～6歳、6～12歳の子を持つ母親の現在の喫煙率はそれぞれ、20.7%、22%、17.4%である。母親の1日の喫煙本数に基づき、1～9本、10～19本、20本以上の3群に分け、子どもの問題行動との相関をみた。その結果、子どもの行動中、おどす・暴力を加える・気性が激しく、かんしゃく持ち・他人の活動を妨害する・集団の中での悪行・注意を素直に聞かない・情緒不安定などの項目で、喫煙数20本以上の母親の子が他の子に比して有意に高頻度になっていた。

妊婦について喫煙の有害性に関する知識（情報）をどのようにして得ているかを調査したところ、マスメディアからが54.4%、保健所・医療機関からが22.8%、母子手帳から9.6%、学校4.8%、その他2.8%であった。このことは保健所での指導を強化することは勿論であるが、特に学校で子どもたちが喫煙前に教育するのが大事であること

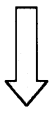
を示している。介入研究についてはまだ報告できるデータはでていない。

#### IV. 研究結果の活用方法と今後の課題

居住環境はそこに住んでいる人の意志で変えられる部分とそうでない部分がある。仮に高層階居住が妊婦・子どもに良くないという結果が出ても、容易に下層階に居住を移すことは不可能である。ただ、いろいろと分析してみると、生活指導のあり方によっては改善される部分もかなりあり、このことはわれわれに望みを与えてくれる。生活環境の整備、例えば広場の設置、医療機関の設置場所の検討など、将来高層階住居をつくる時に必要なデータについても、今度の研究から得る処があったと思う。

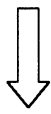
狭い日本をどう広く、豊かに使うか、という答えを出すのに研究を続けていきたい。

煙草が若い女性の間で1つのファッションのようになってきている。今回得られたデータは子どもの心の発達にも、母親の受動喫煙が関与していることを示唆し、重大な問題を含んでいると思う。これを予防するためにはどうするのが効果的なのか、それを研究することの重要性を感じている。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:(1)高層階居住の母子関係は下層階居住のそれより密着し、自立を妨げているという問題は確実に改善の方向に向いている。しかし、子ども同士のつきあいでは、高層階居住の場合の方が下層階居住の場合に比して兄弟同士で遊ぶ割合が多く、友人との遊ぶ割合は少ない傾向にある。また団地内のコミュニケーションである団地内開催の行事への参加状況は低層階居住者の方が高層階居住者より多い。(2)低層階居住妊婦に比べ、高層階居住妊婦の方に流産が多くみられるが、後者では外出回数が少なく、飲酒習慣の比率も高いことが判明した。また一般的に言って居住階に関係なく妊婦の相談者の少ないと流産比率がより高い。(3)母親による受動喫煙は子どもの心身発育に悪影響を及ぼす。